

新潟大学人文学部 表現プロジェクト演習 Q「佐渡の祭りに参加しよう」

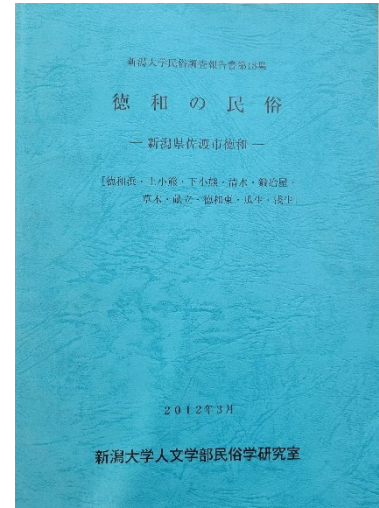
浅生の鬼太鼓組に弟子入りした 14 年

引率教員：加賀谷真梨（民俗学）

発表者：新井里奈、本澤華奈、横田麻優子

1. 新潟大学人文学部と徳和との繋がり

新潟大学人文学部の民俗学研究室では、毎年県内外の集落で民俗調査実習を行っている。2010 年度の調査地は徳和であり、その際大棕神社の祭礼や鬼太鼓に関する聞き書きを行い、その成果を民俗実習報告書『徳和の民俗』として 2012 年 3 月に刊行した。奇しくも、2009 年に人文学部は文科省の GP に採択され、「表現プロジェクト演習」を冠した個性的な授業の開講が期待され、翌 2010 年には人文学部と佐渡市教育委員会とが連携協定を結んだ時期でもあった。そこで、地域住民と民俗学研究室との間にできた関係をより深めることを目的とし、当時の民俗学教員である池田哲夫氏と徳和在住の故佐藤一富氏との間で協議し、大棕神社で開催される徳和の秋祭りに学生が参加する授業（浅生の鬼太鼓組に加わり鬼太鼓を習得する授業）を 2013 年度より開講する運びとなった。以来、コロナ禍の 4 年間を除く 9 年間、学生が浅生の住民の指導の下、9 月 12 日から 3 日間集中的に太鼓と鬼を打つ稽古をし、15 日の祭りに臨むという形式の授業を行ってきた。なお、加賀谷は 2016 年の着任時よりこの祭りに参加している。



2. 徳和まつり

徳和には神社が 2 つあり、春には徳和神社で、秋には大棕神社で祭りが開催される。秋祭りは 9 月 15 日に神輿を宮出しした後、御旅所まで行き、18 時頃に宮入という流れである。神輿が通る道を清め祓う役割を、浅生の鬼太鼓と鍛冶屋・小熊・徳和浜・草木の 4 集落で担う大獅子が担っている。宮入前の夕暮れ時に参道の急階段を神輿や獅子が登る様子は圧巻である。浅生は 15 戸ほどの集落のため、若い学生が多く参加することで鬼太鼓組をにぎやかしてきた。

3. 2024 年 9 月 12 日～14 日の様子

日中は、浅生の鬼太鼓の伝承者である倉田邦仁さんをはじめ、地域の方々にサンライズ城が浜で太鼓と鬼の打ち方を指導頂いた。バチの持ち方や音の強弱のつけ方などの細かいところもたくさん教わり、太鼓に不慣れな学生も徐々に上達が見られるようになった。また、浅生の鬼太鼓の由来や打ち方の意味もご教示頂いた。学生らは、地域で伝統を継承していくことの重みを肌で感じとりながら午前も午後も熱心に稽古に打ち込んだ。



夜は 19 時から 21 時までの 2 時間、打ち子の子どもたちや鬼連中らと大浅生（屋号）の庭で稽古した。最初の頃こそ恥ずかしさや照れがみられたが、次第に声も大きく出せるようになった。



4. 9 月 15 日

朝 5 時に大浅生に集合し衣装を身に着け準備をはじめるものの、20 数年ぶりの大雨となり、定刻出発を見合わせるほどであった。大浅生では例年通り御神酒や菓子がふるまわれ、無事に鬼太鼓連中が浅生に戻ってくるよう祝詞が唱えられた。小降りになる頃合いを見計らって出発し、雨宿りをしながら浅生の各戸を廻った。各家では鬼連中、打ち子に対してハナがあがり、役員による口上が述べられると名前が呼ばれた鬼や打ち子が打つ。



雨で神輿巡行が取り止めとなったため、御旅所に行くこともなく、浅生の集会所で昼は休憩した。しかし、鬼の来訪を楽しみにしていた地域のお年寄りが車でかけつけ、鬼が車内に向かって切り込み、涙ぐみながら感謝を述べる場面に遭遇し、祭りの地域の人たちにとっての重要性を改めて噛みしめた。

学生は、3 日間の稽古の成果を十分に発揮できないどころか、雨に打たれて全身ずぶぬれで士気も下がり体調面も心配されたことから、任意で残るグループと宿に戻るグループに分散した。発表者の横田、新井、本澤は任意で残り 18 時まで門付けしてまわった。



5. 本授業の意義

浅生の人たちが、当地に伝わる鬼太鼓をいかに大切にしているかは、鬼連中を歓待する家々のもてなしにもあらわれている。たくさんの料理や飲み物を用意し、鬼連中をもてなすことは高齢者世帯にとって大変なことである。しかし、遺影に鬼を見せるなど、迎え入れる家々の祭りへの想いを感じ取ることができた。他方、学生は祭りの担い手として、朝から晩まで坂道を上り下つての過酷な門付けという鬼連中と経験を同じくし、鬼太鼓組として一つになる感覚に至ることができる。そうした祭りの神髄を浅生の皆さんは長い間学生に経験させてくださった。この授業は 2024 年度をもって一旦休講となるが、徳和地区

の皆さま、浅生の皆さまには、これまでのご厚誼に改めて感謝申し上げます。

